

教育文化会館「子どもと「ホームレス」の人がどう出会うか」第3回

北村年子さんのお話とグループワーク

日 時：2005年1月27日（木）午後2時～4時45分

会 場：川崎市教育文化会館 5階 視聴覚室

参加者：77人（高校生58人、教員3人、一般参加16人）

内 容：①北村年子さんのお話、②グループワーク、③発表とコメント

①北村年子さんのお話（午後2時15分～3時45分、90分間）

- ・ 私と野宿の人たちとの出会いからお話したい。ちょうど10年前、1995年秋に起こった大阪での野宿者襲撃事件。3年間取材してこの本にまとめた。
- ・ 私が訊くことに答える時、間違えてもいいんですよ。思ったことをこの場では我慢しなくてもいい。感じたままを表現してください。誰かの権利を大きく妨害しない限り結構です。

（1）野宿の人たちの置かれている状況

- ・ 普段私は野宿生活をしている人を「ホームレス」とはいわない。人ではなく状態を表す言葉だから。「野宿の人」「野宿の仲間」とか「先輩」と呼ぶ。敬うべき先生と思っている。ただ私のことは「先生」と呼ばないでください（笑）。
- ・ 本来、「ホームレス」とは「安全で、安心できる住環境にない状態」を指す言葉。新聞配達など住み込みの仕事をしている人もそうだし、地震など天災の被災者、難民など、自分が望んで選んだのではなくホームレスになる人はたくさんいる。
- ・ 「寄せ場」は日雇い労働者の町。私は28歳の時に大阪の釜ヶ崎に行った。日本の「三大寄せ場」の一つといわれている。他の二つは東京の山谷と横浜の寿町。知っていますか？（「母が寿保育園で働いていた」との声）なぜ寿町にホームレスの人が多いと思いますか？（「自立支援センターがあるから」との声）よく知っていますね。自立支援センターがようやく出来てきたが、ここに入れない人も多い。寄せ場にはドヤ街がある。「ドヤ」とは簡易宿泊所のこと。
- ・ 「日雇い労働者」とは、3K（きつい、きたない、きけん）労働に携わる人たち。高度経済成長期には仕事がたくさんあったが、年をとるともっと若い人に仕事をとられる。釜ヶ崎の「あいりんセンター」のような就労斡旋所に仕事を求めにいくが、ケガをしたり病気になったり、高齢になり働けなくなると、切り捨てられてしまう。業者は雇ってくれない。手配師が人を振り分け選別していく。まさに使い捨てられていく。
- ・ また高い所から落ちたり、過労で内臓をやられたりする。定住所がないと定職につけない。また定職がないとアパートなどを借りることができないという悪循環になっている。
- ・ 野宿の人たちのほとんどは日雇い労働をしてきた。また、野宿をしながら肉体労働をしている人もいる。なかなかお金もたまらない。何日間もリヤカーを引いて歩いて集めた

ダンボールの山が 500 円とか。野宿をしたことはありますか？本当に寒い。3 日も続くとうなるか。体の芯から蝕まれていく。それでも生きている。頑張っている。

- ・ 野宿している人はお酒を飲む人が多い。なぜだと思いますか？お酒を飲まないとやっていけないから。体を温めたいから。家族を思い出して。孤独で寂しくて。いろんな理由がある。もちろん「それは弱いよ」といえばそれまで。お酒を飲んで社会のルールから逸脱しているというかもしれない。お酒でストレスや苦しみを紛らわす、という人もいます。みんなもむしゃくしゃする時はメールをやったりゲームしたりすることはあるでしょう？でもお酒の場合は体が蝕ばれる。他の解消法があれば変わる可能性もある。
- ・ あったかい飲み物、食べ物だけでなく、あったかい言葉がけ。一日に一回でもあったかい声をかけてもらえればお酒をやめられるかもしれない。AA（アルコール・ホリック）の会もいろいろな所にできてきている。

（2）二つの事件から

- ・ 2002 年の熊谷の中学生による襲撃事件はこれまでと様相が違う。①これまでは繁華街だったが住宅地だった。②被害者 I さんの年齢が 45 歳と若い。③中学生の 3 人も特別な凶悪犯ではけっしてなかった。④これまでは自分のストレスやいらだちをぶつける行きずりの襲撃だったが、この被害者は地域の人たちに以前から知られていた。学校の先生も地域住民も、みんなが知っている中で起こった事件だった。⑤日雇い労働者ではなかった。大学を出てドイツ語の原書を翻訳できるほどだった。野宿の仲間には元オリンピック選手や元大学教授もいる。この方は 20 代で家出して各地を転々とした。なんらかの心の傷や病を抱えていたのかもしれない。
- ・ 中学生と I さんは、ともに「ホーム」レスだったと思う。「ホーム」は安心できる「心が還（かえ）れる居場所」をいう。そういう居場所（ホーム）のない状態が「ホーム・レス」である。「自分には価値がある」「安心していいんだ」「ありのままの自分でいいんだ」という状態になればその人もホーム・レスだ、と教えてくれたのは元不登校だった S くん。学校でいじめられ、居場所を持たず、家に引きこもったが親にも否定され、自分の部屋に 3 年間こもっていた。どこにも安心できる居場所がなかった。17 歳でフリースクールに出会い、20 歳で新宿の野宿者にゆで卵を配るボランティア「たまパト」に参加してくれた。「僕には屋根のある大きな家があるけど、安心して眠れる家はない。心が還れる居場所がない。だから毎日、自分の部屋で布団に入るときも、明日、僕は生きてるかなあって思いながら夜を明かしている。おじさんたちも、この寒い空の下で、明日、自分は生きてられるんだろうかって不安のなかで、長い夜を過ごすんだと思う。だから僕もおじさんたちと同じ、ホームレスなんだと思う」¹と言っていた。
- ・ 必要なのは肯定しあえる関係。「大丈夫だよ、誰がなんといおうとあんたには素敵なのがあるよ」といつてくれる人が一人でもいれば、自分を肯定できる。おじさんたちがお酒を飲みたくなったりするのは、自分を肯定できない状態なのかもしれない。

¹ 北村年子「解説」吉田俊一『ホームレス暴行死事件』新風舎、2004 年、p.202

- ・ 今日ここにいるみなさんも、誰かに否定的なことをいわれて傷ついた体験があるかもしれない。また、目の前でいじめがあったのに見過ごしたり、同じようにいじめてしまった体験があるかもしれない。何か自分の体験から想像をふくらませてほしいと思う。
- ・ 1995 年の大阪・道頓堀の事件の加害者ゼロ君もいじめられっ子だった。てんかんという、発作性の持病のため、誤解や偏見、差別にあっていた。強い発作が起きると意識を失って倒れたりしてしまい、その間の記憶は飛んでしまう。脳の疾患であるのに「遺伝する」「気味悪い」「うつる」などと周りが恐れたり、間違った偏見を持たれてきた。
- ・ 彼はパシリ、万引きなどをいじめっ子に指示され、断れずに盗みを働き、救護院に入る。その後、電気工員として 3 年間働いたが、発作を止める薬を飲んでぼうっとしたり、記憶がなくなること自信を失ったり、後輩にバカにされたりして、その後、トビ職やパチンコ店員など職を転々としている。野宿者の藤本さんは戎橋のたもとでリヤカーで寝ていたが、実はゼロ君も「ホームレス」だった。事件当時は、定職なし・定住所なし。就職の面接にいつても断られる。なぜか。持病のための就労差別だった。仕事があったときは、野宿のおっちゃんたちに食べ物を差し入れたり、演歌と一緒に歌ったりする「やさしい奴だった」という。自己肯定できる自尊感情があった時は、おじさんたちにもあったかいプラスの感情があった。
- ・ それなのになぜ？ いじめられる痛みがわかるのに、抵抗もできない野宿のおじさんを襲ったのでしょうか？ どこに行ってもいじめられ、差別を受けると、差別は自分を否定されることだから、自尊感情が傷つけられていく。やがて自分で自分を否定する「自己いじめ」が始まる。その自己否定の「つらさ」から他者いじめ・弱者いじめに向かう。
- ・ もう一つ気づいてほしいのは、事件の時、現場の橋の上にいたのは藤本さんとゼロ君だけではなくということ。30 数人もの、サラリーマンも、主婦も学生もいた。藤本さんを救うチャンスは何回もあった。なぜ「危ない！やめろ！」と止める人が誰もいなかったのか？ある目撃者は「心の内では助けなあかんと思った。でも、落とされたのは、野宿の人やった」²と毎日新聞の記者に正直に語った。私たちの中にも傍観者の気持ちがあるかもしれない。見てみぬふりをしていることも加害者と同じだと思う。いじめられている人を心の中で差別してないか、見殺しにしていないか。いつも問われている。一人ひとりが問い直しをしてくれるといいなと思う。

(3) 一緒に考えたいこと

- ・ ゼロ君は、野宿の人を見ていると「昔、いじめられてたころの自分を見ているようで」³腹が立ったという。今回の講座に参加している高校生からもいじめるのは「自分の嫌いな自分に似ているから」という感想を寄せてくれた人がいた。自分の本当の気持ちを抑圧して我慢していると相手のありのままを許せない。「僕は僕、君は君」と見られない。「男は泣いたらあかん、強くなくては」と我慢し、がんばっている人ほど、泣く人、

² 北村年子『大阪・道頓堀川「ホームレス」襲撃事件』太郎次郎社、1997 年、p.87

³ 北村年子『大阪・道頓堀川「ホームレス」襲撃事件』太郎次郎社、1997 年、p.183

がんばれない人を、許せない、受け入れられない。自分も泣きたい時に泣ける人は、人にも「泣きたいんやな」とありのままを認められる。

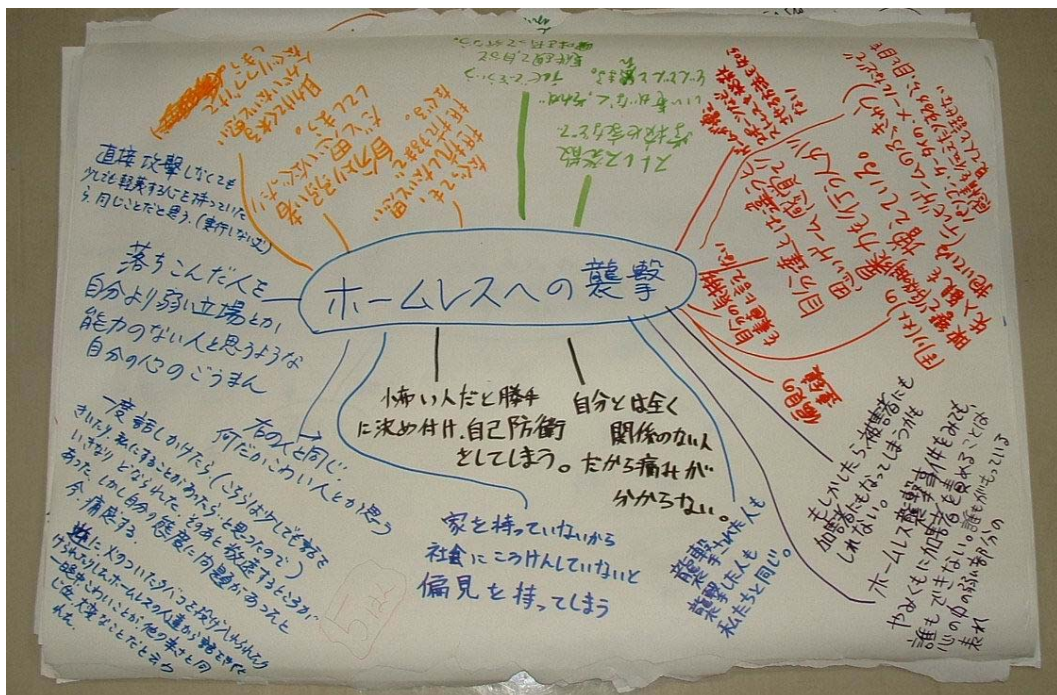
- みんなは、どんな時に人をいじめたくなるんだろう？（「むしゃくしゃする時」「いらいら、むかむかする時」「ストレス」との声）じゃあ、ストレスの中身は？（「不都合な時、相手が自分の思うとおりにしてくれない時」との声）これは児童虐待もそうですね。よく「いい子」というが、親にとっては「自分の思う通りになる都合のいい子」のこと。「いい子」でないと腹が立ち虐待のリスクが高まる。（他に「自分が思い通りにいかない時」「何かやっているのにうまくいかない時」「時間通りやれなかったり。レポートを書くのに3時間で書こうとして5時間かかったり」との声）こうであらねばならないという自分に対するいらだち。自分を許せない気持ち。みんなの中にあるストレスの根っこを考え、感情を言葉にしていくことが大切だと思います。
- K君という男の子は「いらいら・むしゃくしゃ」といった感情を言語化してくれた。「いじめ側側の気持ち」をこう教えてくれた。「ぼくがいじめたときは、いつも自分がつらいときでした。いじめることによって、自分のつらい精神状態が、少しいい状態になるような気がしました」⁴。その中身は？と訊くと、「ぼくは自分に価値があるってあまり思えないから、人を、他人を、否定したいんですよ。他人を否定すれば、自分がましに見えるから」⁵。自分に価値があると思えないつらさ。いじめる側の心にはそんな自己否定感がある。だからいじめを本当になくすには、一人一人が自分には価値があると思えること、今の自分を肯定できることがまず必要で大事。野宿の人たちへの理解を深めると共に、みんな一人一人にあるいいところ、自分の価値を認めてほしい。

⁴ 北村年子、前掲書、p.179

⁵ 北村年子、前掲書、p.180

高校生・大人を含めて10グループに分かれ、「なぜ？ホームレスへの襲撃、いじめ」をテーマにウェビング。

- ・こんなに素晴らしい発表をきけてとても嬉しい。「なぜ弱い人をいじめるのか」。その本当の気持ちが知りたくて加害者の少年たちに問うてきたが、子どものことは子どもが一番よく知っている。私たち大人も想像してみるがそれは想像にすぎない。あなたたちが生きている「時代」があり、同時代の感覚・共感・理解がある。それを私たちに伝えられる「先生」はあなたたち自身です。
- ・みんな一生懸命考えて答えてくれた。そして私も勇気をもらった。本気で問えば本気で答えてくれること。改めて本当にありがとう。
- ・女子生徒のE子ちゃんが、自分が触れ合ったおじさんの話を自発的に話してくれた。本当は私の話を聞いたり映像を見るより、野宿のおじさんと直接出会って欲しい。私はしよせん代弁者にすぎない。本当はあなた達自身が、自分の言葉で自信を持って伝えていくといいと思う。野宿のおじさんたちも、つらいことは話したがらなくても、いろんな生活の知恵を見せてくれるかもしれない。私たちの知らない世界を知っている。それはE子ちゃんが「おじさんたちはすごいなあ」と自分の体験を通して感じたことでもある。



- ・ 今日私が話したことはほんの一部にすぎない。これをすべてと思わないでほしい。おじさんたちの中には優しい人も、怒鳴る人、怒る人もいる。みんなと同じようにいろんな個性がある。自分自身で実感して、自分自身の答えを見つけてください。そして自分自身の体験を人に伝えていってください。
- ・ 今日みんなのウェビングの模造紙をぜんぶ宝物にして、全国のいろんな人の役に立つようにしたい。

感想文から（高校1年生37人・3年生15人）

高校生たちは講座2回目ということもあってか、野宿生活者に対して持ってきたマイナスイメージなども含めて率直な思いを書いた感想文が目立ちました。これは北村さんから「正直に、自分の思ったままを書いていいんだよ」というメッセージを受け取ったという証明でもあるでしょう。特に4分の1～3分の1の学生は「ホーム（居場所）・レス」と「悪循環」の話が印象的だったと挙げていました。

	ポイント	内 容
I 印 象 的 だ っ た こ と	①ホーム（居場所）・レス	『ホームレス』。私には関係のない言葉と思ってた。しかしむしろ本当に身近な言葉だった。思えば私も『ホームレス』なのだなあと思った。それは自分が帰る家には、私の『居場所』がないから』『家がない人だけがホームレスではない』と聞いて共感した。家での孤立感がある。どんな子どもだって大人に『あんたの〇〇ってところすごく好き』とかほめられたりしたいのに、自分を否定し続けている」その他多数
	②定住所なし→定職なし→定住所なしの悪循環	「努力してないわけではなかった」「自分はバイトとかする時履歴書を書く。もちろん住所の欄があり、当たり前のように書いていた」「掃除とか仕事を選ばなければたくさんあるはずと感じていた。しかしそれは間違っていた」「ホームレスになってしまうのは個人的な理由だけではないと感じた。ホームレスにチャンスを与えない社会の底辺に問題がある」その他多数
	③心のあったかさを求める	「一番欲しいのは心の温かさだということが一番印象に残った。マザーテレサが『人がもつとも悲惨な状態は病気や貧困ではなく、自分が他人から必要とされなくなった時である』と言っていた。ホームレスの方たちもこのことを恐れているのではないか」「普段、何気なく道を歩いているとホームレスの人がたまに声をかけてくる。あまり関わらないように走り去るようにしていた。しかし誰かに話し相手になってほしかったのか、と思った」「ホームレスの人達も、ホームレスを殺してしまった少年達も同じなのだ。彼らは暖かい心や気持ちを求めている。そんな気持ちに気づくことのできない私達。彼らに対しどんな気持ちで、どんな言葉で接していくかが大きな課題になる」

	④「良い子」	「今回一番印象に残ったのは、世間で言われる『良い子』という言葉は決して良い意味ではないということ。『自分の思いどおりになる子』を『良い子』というのは親の自分勝手な考え方」
	⑤就労差別について	「エイズやガンについてある程度の知識は学校や地域などで得ることができるが、てんかんについての授業は受けたことがない。そんな環境も一つの原因になっているのではないだろうか」
Ⅱ 自分の経験をふりかえる	①無関心への反省	「私の出身中学校の生徒も『ホームレス』の人達に石を投げたとか、花火を投げたなどの暴行事件を起こしたこともあった。でも『私はそんなことしないから関係ない』ばかりでそれ以上はあまり考えないようにしていた。直接『ホームレス』の人達に危害を加えることはない。だがいじめを傍観している人のような『気づかないふりをして見ないことにしてる人』に自分はなっていたのだ」
	②友達になった経験	「中学か小学生の時ホームレスの人と友達になったことがある。その人は本当にどこにでもいるようなおじさんだった。お母さんたちは『危ないから仲良くしちゃダメ』などと言っていたけれど、私は危険などまったく感じる事がなかった。逆に私の知らないことをたくさん知っていて、すごく楽しいおじさんだった。確かにあまり良い人ではない人も見てきたが、誰もが良い人ではないと思う。ホームレスとか関係なしに色々な人がいて当たり前だと思う」
Ⅲ 内省的に考える	①襲撃する心理に自らを重ねる	「中学生の頃の自分を思い出してみたい。お父さんやお母さんに言われることがすべてウザいと思っていたし、友達関係もおもしろくなかった。自分の周りの人はみんな私を否定していると思っていた。中学生が襲撃したのもストレス発散だったと聞いて、私と同じように毎日楽しくなかったんだと思う」「自分より弱い者をいじめて優越感を得るという。私は中学生の頃ならやりかねなかったなあと考えてしまった。私が欲しかったもの。それは自分を認めてくれる人。自分（私）が自分（私）でよいと認めて欲しかった。今の大人は子どもの話を後回しにして結局聞いてくれない」「中学生の時から、自分が落ち込んでいる時とか何を聞いてもダメな時があった。うるさくしか聞こえなかったり余計に落ち込んじゃったりした。でも後からその言葉がすごく支えになったりした。今思うと、支えてくれた人がたくさんいたから事件とか起こさなかっただけで、私も同じような事件を起こしていたかもしれない」「非行少年などは我慢などしないで好き勝手やっているけど、普通の生徒は我慢してストレスを溜めこんでしまうから、ホームレスの方に当たってしまう」

	②人との 関わり・ 受け止めること	「ホームレスの人達を直接的に守ることも方法の一つだと思うが、北村さんの話を聴いていると、襲撃事件をなくすには『子どもに対してのケア』も必要なのではないか。私は周りの友達の状態にも気を遣ってほしいと思う。自分の人生は他人の人生に関係しているのだ」「今の日本は便利すぎて他人と協力しなくなってしまった。人と人との関わり合いできっとすべてが変わると思う。こんな事件も起こさなくなると思う。日本全体が変わらなきゃいけない」「人間は弱い者いじめが多い。これをなくすには、自分の感じたことをそのまま生かし、誰かにストレスを受け止めてもらえるような環境などが必要なのではないか」「うちも、辛い時・イライラする時は何かストレス解消したり、友達や家族、先生などが話を聞いてくれたり、何かたった一言『大丈夫だよ』でもやさしい言葉をかけてくれたりしたから落ち着くことができた」「他人を非難したり否定することは簡単だ。だが人を信じたり肯定することは難しい。それができるようになれば私も他人の力になれるのだと思う」
	③自尊心	「私が持っている価値観の大半が自己否定だ。自分の良い所を何一つ知らないから。でも今回の講演を聞いてその価値観こそが他人への否定につながるということが分かった。援助者として、一人の人間として、自己の持つ価値観についてもっと肯定的になりたい」「誰もが一度は自分に価値がないと思ったことがあると思う。周りに誰か一人でも自分を必要だと言ってくれる人がいたら、この二つ以外の事件も起きなかったかもしれない。救うチャンスはいくらでもあるのだ」「思い出したくないし向き合おうともしなかった昔の自分をリアルに思い出した。最初は少し聞くのが嫌だった。だけど向き合うチャンスかと思い、だんだんと、自分が逃げて忘れようとしていた昔の自分を思い出せた。中3の自分は『死んでもいい』とか、自分が生きていることに実感がなく（中略）自分の居場所を見つけるためにいろんなことをした。だけどそれは、結局その時の『現在の自分』を見つめずに逃げてた結果なんだと分かった」
Ⅳ 講 座 に つ い て	①グルー プワーク の新鮮な 経験	「みんな結構自分の意見を書いてくれて、大人の人も、自分のボランティア体験も話してくれて、すごく良い体験ができた」「大人の人の意見や自分たちの意見を聞いてもらった。普段、講義などを聞きに行っても意見交換をしたりしないのでとても良い経験をした」「大人の人も聞いて、はじめは『意見合うのかな?』とか思ったけれど、どんな心配は全然せずにできた。先輩とのふれあいもできた。一人ひとり色々な意見を持っていて、その意見に自分も共感できるし、自分の意見を言って共感してくれることもとても嬉しかった」
	②ウェビ ング	「自分がムカつく時→男に振られた時→ヤリ捨て→うざい→悔しい→悲しい→大切にしたい→大切な人、との連想ができた。悔しいとか悲しいは自分

		の弱い心だから、誰にも知られたくなかった。最後の『大切にしてほしい』は考えたこともなかった言葉だった。素直になぜか自分の本音を受け止めていた自分にびっくりした。誰にも見せたくないような本音なども発表できたりして、とても不思議に思った。素直になることも大切なんだなと思った」
	③さらなる関心	「北村さんも言われていたけれど、ここでどんなに話し合いをしても、やっぱり一番良いのは実際にホームレスの人達と会話をして交流を持つことだ」「ホームレスの方ともっと話してみたい。パトロールにも参加したい。興味がすごく湧いた。この気持ちがこれからの社会には必要だと思う。これからは隣三軒両隣になりたい」「私はもっと野宿生活をしている人のことを知りたい。2月10日の講義にもぜひ参加してみたい」「北村さんが出会った人達についてもっと話を聞かせてほしい」「ホームレスの方とふれあう機会を授業で作ってほしい。水曜パトロールへ行って体験したい」
V	北村さんへの共感	「言葉の重みを感じた。一言で相手を傷つけたり喜ばせたりできる。中でも『ありがとう』。この一言はすごく大きいと思った」「北村さんが涙した時は、僕も感動した」「中1・2の時に SEVENTEEN の相談コーナーとかもちゃんと見て、時には相談している女の子に共感し、相談係の方の言葉を見て感動していた自分の目の前にその相談係の北村年子さんがいて、すごいびっくりした」「人柄も良く、歓喜の涙を見せてくれた時は本当に嬉しかった」